

前期：キリスト教と近代的知——宗教哲学構想

オリエンテーション——「キリスト教と近代社会の諸問題」

1. 前年度のまとめ——象徴論・言語論
2. 近代/ポスト近代と宗教哲学構想

後期：キリスト教と社会理論——経済と環境

3. 「神」の現在
4. 聖書から経済・政治・社会
5. キリスト教と経済学説

< Exkurs >

1. 思想史研究の可能性——近代日本キリスト教思想研究から
 2. 脳神経科学と宗教
6. キリスト教と政治理論 → 2012年度へ

< 前回 > 思想史研究の可能性——近代日本キリスト教思想研究から**(1) 思想の時間性・歴史性**

0. Paul Tillich, *Die religiöse Lage der Gegenwart* (1926), in: *Main Works* 5, de Gruyter, 1988.

(2) 思想史研究再考

1. ドミニク・ラカプラ『思想史再考』平凡社。(Dominick Lacapra, *Rethinking Intellectual History. Texts, Contexts, Language*, Cornell University Press, 1983.)

(3) 思想研究の一領域あるいは基礎としての評伝研究

- ・思想家と時代状況、思想史的文脈との関わりを叙述する。
- ・思想家の生涯・伝記的事実を実証的に確認しつつ思想形成と思想の発展史を描く。その意味における思想家の全体像の再構成を試みる。
- ・思想家の思想的意義と限界を明らかにする。

(4) まとめ

- ・研究対象への距離 → 過去 of 思想、地平融合
- ・過去の過去：思想史における思想、過去の問題連関において
- ・過去の現在：思想家の意図・問題意識→評伝の意義、社会史、そしてテキスト自体へ
- ・過去の未来：未完の意味の可能性→脱構築、知の考古学

< Exkurs >**2. 脳神経科学と宗教****1. 問題——脳神経科学をめぐる議論と研究の広がり**

1980年代以降、脳科学が周辺の関連領域を巻き込みながら急速な発展を示している。「人間についてのより包括的な理解のためには、こうした脳科学研究——脳の諸領域の活動に関するマッピング解析——とともに、認知科学、心理学、教育学、哲学、社会学、経済学等を含めた幅広い学問領域を包括する学際的な研究が求められていることなるだろう」(中山剛史・坂上雅道編『脳科学と哲学の出会い——脳・生命・心』玉川大学出版部、2008年、3頁)と指摘される通りである。これはキリスト教研究を含む宗教研究全般にとっても無関係ではない。ダキリとニューバーグの研究などによって知られるようになった「脳神経神学」(あるいは神経神学)は、すでに一定の研究領域を切り開きつつあると言えよう(高村夏輝「神経神学は神を救うか」、信原幸弘・原塑編『脳神経倫理学の展望』勁草書

房、2008年、315-340頁)。またキリスト教神学は、新たな脳科学の進展にいかに対応し、関係構築を行うかについて模索を始めつつある(マクグラス『「自然」を神学する——キリスト教自然神学の新展開』教文館、2011年、122-147頁)。

本稿のテーマは、こうした宗教研究、キリスト教神学における動向について、その争点あるいは論点を整理しつつ、今後の研究を展望することにある。問題は、現在複雑な動きの中で展開しつつあるこの動向をどのように整理できるのか、という点である。本稿が目にするのは、「脳と宗教経験」という問題がそれ自体の歴史的な前提や背景を有するという点である。本稿で取り上げるヒックが述べるように(11-15頁)、十九世紀には多くの科学者や哲学者が「亜酸化窒素」などの吸引が宗教体験にいかに関わるかについて実験を行っており、それは西洋思想史の長い自然哲学の伝統と無関係ではない。したがって、「脳科学と宗教」の問題を整理するには、長い思想史的背景を念頭に置くことが有益であろう。

本稿では、「自然主義と宗教」と「創発性」という二つを問題整理のための文脈として設定する。前者は、西洋における「宗教と科学」関係史の主要な論点の一つであり、第二章において、ヒックの議論を通して取り上げられる。それに対して後者は、自然哲学の伝統に関わる論点であり、第三章において、デイヴィス、クレイトン、清水博、ルーマンなどの議論を参照しつつ論じられる。そして最終章では、こうした議論に立って、脳科学が宗教研究にとって持つ意味をまとめ、今後のさらなる議論の展望を試みることにしたい。

2. ヒックと還元主義的脳科学批判

1・1 脳科学と宗教研究——脳神経神学？

ジョン・ヒック『人はいかにして神と出会うか 宗教多元主義から脳科学への応答』法蔵館、2011年。

「過去五十数年のあいだに、脳の研究は神経科学の多方面に広がった。いまや神経生物学には神経生理学、神経内分泌学、神経薬物遺伝子反応学、神経測定まで取り込まれ、さらに神経テクノロジーを生みだし、また発展し続ける神経遺伝学産業にも関連しながら、神経経済学や神経倫理学にまで向かおうとしている」(ヒック、10頁)。

1・2 脳科学の哲学

複雑な問題を整理し、争点・論点を明らかにする。これが、哲学の役割。ヒックの議論で評価できるのはこの点。

現象学や心の哲学における争点：クオリア、心の志向性は、生命や物質のレベルへ還元できるか。また、実体論的二元論へ回帰できるか。

現代の自然主義的世界観

「脳の内部構造や脳の働きを研究する脳神経科学の成果と本書のテーマ、すなわち宗教体験が超越的実在に触れた体験として、当の体験者によって理性的に受け入れられうるものかどうかというテーマは、どのように関連するのだろうか」

「まずは自然主義の世界観を頭に入れておく必要がある。これは近代の西欧思想の中心にあるもので、仮想の実在というようなものの可能性を一切認めない考えである」(3)

「根本的な信仰簡条」「科学内部の、つまりは一般社会内部での優勢な無批判的仮説なしは根本的なパラダイム」、「唯物論者である哲学者のジョン・サールは、実際に次のように発言している。「唯物論が私たちの時代の宗教であるという感覚は確かにある」

「ハードな、つまり唯物論的な自然主義と、ソフトな自然主義とがある」(4)

「脳神経科学が宗教体験に向ける挑戦は、ハードかソフトのいずれか一方の唯物論を前提にすることができ、しかもそのどちらを前提にしても矛盾を生じさせない」(5)

「ダニエル・デネット」「一口で言うなら、心とは脳のことである」(6)

「関係する分野の科学者のあいだには、ほとんどの者が、と言ってよいほど、この考えである」、「デカルト」「物心二元論」「偉大なる錯導者」「機械のなかの幽霊説」

宗教的唯物論か

「一部の著者たちは、依然として唯物論に宗教的な輝きを与えようとしている」、「そのタイトルが宗教を擁護するようでありながら、実は物理主義的な前提に立って心を理解しているものがある。いまでは脳神経神学について語る者までいる」「アンドリュー・ニューベルグとユージーン・ダキリ」、「一部の神学者もまたこの物理主義的な見方を是認している」(8)

「心身は不可分、あるいは反対に心身は別物という両方の考えは、キリスト教史の始まりから今日にいたるまで折り合うことなく、どちらも連綿として続いている」(9)

脳から意識への因果性

「脳の各領域における活動に関するマッピング解析」(10)

「脳は生きた総体として働いている」、「脳は宗教体験という意識の瞬間をどのように作りだすのだろうか」、「薬物が脳の化学的性質を変えろという事実」(11)

「ベンジャミン・リベットの実験」「脳の活動のなかには、意識的に決断が下されるよりも、およそ〇・五秒」「早く生じる」(15)

神と大脳辺縁系

「ラマチェンドラン」(15)

「神とか、生きることの宗教的意義は、脳の部分的異常の産物なのだろうかという疑問が生じる」(18)

瞑想と脳

「別の種類の宗教体験も脳神経科学者によって研究されている」、「瞑想中の自己超越の感覚」(18)

「リタ・カーターは」「わかりやすく要約」(22)

「宗教体験に対する脳神経科学からの挑戦は、以下のように列挙することができるだろう」

「1. 「パーシプターのヘルメット」によるてんかん発作と前頭葉刺激は宗教的幻想の原因となる」、「2. 向精神薬はさまざまなかたちの宗教体験をもいたらす」、「3. 「純粹意識」、空、無、空性（シューニヤター）の意識は、知覚から取り込むすべての入力を切断したあとにも残存する意識が原因で生じる」、「4. すべての実在との一体感は、個人の身体的な境界意識を遮断することで生じる」、「5. 神の存在あるいはそのほかの超自然的な存在の感覚は、「自我システム」を二分して一方が他方を別の実体と見るときに生じる」、「宗教体験が自然のプロセスによって生じるもの」「もっぱら妄想であると主張する重大な論拠」(23)

1・3 ヒックの心脳一元論批判

心脳同一論は、強い自然主義、還元主義的物理主義（唯物論）に基づいているが、それは十分に合理的か。論点先取（心的過程と物理的過程の同一視という前提に立って、それを論証したかの議論を行う）をおかしており、その論証は成り立たない。

「神経生理学者の多くは」「脳と意識の関係といった哲学的な問題に、とくに興味はあるわけではない」、「簡単な問題と難解な問題との区別」(24)

問題点の整理

「問うべき問題点」

「脳は何かしら特殊な物理的状态ないし過程」「心脳同一論」

「随伴現象説（意識は脳活動の一時的で非物理的ものとする説）」

「意識は自由意志において作用するところの、何らかの執行力を持つのだろうか。執行力を持つ、と私は言いたい」、「非物理的な精神過程は脳機能の電気化学的過程と同じくらい実在的」「非物質的な実体が存在するという可能性を残しておくことになる」(26)

「創発性、複雑性、二重性質、機能主義」(27)

「相関関係」即「同一」とすることの誤り

「心脳同一論は、意識は単純に脳神経活動であり、脳の電気化学作用に他ならない、とする理論である」、「この立場は、意識上の出来事に関連する神経の相関は最高度の計測器を使えばたどることができるという事実によって有望視されている。実際に今日、ほかのことでは意見の違いがあるとしても意識上に生じる変化については、それに対応する変化が脳内のどこかで生じているものと了解されている。このことは宗教体験だけでなく、ほかのどのような体験にも当てはまる」(27)、「観察された相関関係だけを頼りにする限り、確実な共通基盤にとどまることができる。ところが文献の多くに見られる誤りは、「相関関係」を即ち「同一」の意味にとってしまうことである」(27-28)、「スティーブン・ローズが言うように、「相関関係は原因であるとはいえない」ことは明かである。」(28)

論点を先取りすることの誤り

「こうした研究者には、被験者の内観に関する証言を無視することが重要とされる」「日常言語の初歩的な心理学的分類」として退けられる」(28)

「チャーチランドは内観からの論証に関して」「この論証は大いに疑わしい」、「これは体系的な論点の先取りである」(29)、「内観とは、私たちの意識内容、つまり視覚などのクオリアを自覚することであり、この内容は、私たちが現代物理学を知っていようといまいと、変わることがない」(30)、「意識的な感覚および感覚的なクオリアが、感覚を引き起こす神経上の出来事と同じものであると解することで、意識と脳活動が同じものであるのか、ないのか、という論点を先取りしている」、「これはチャーチランドの強い教条的な自然主義によってのみ説明がつけられるであろう」(31)

心脳同一論

「根本的な問題は、たとえ脳の機能について、これ以上はできないというほどに完璧な説明が得られたとしても、脳が関与する実際の意識的経験の説明にはいたらない、ということ」、「トマス・ネーゲル」(31)、「痛みの意識の性質は、脳内で一連のニューロン（神経細胞）が興奮するときのような性質と同じではない」(32)

「真偽はともかく、この脳の活動がなければ意識的な体験はありえないだろうと、述べることに意味がある。しかし脳の活動が文字どおりに患者の意識を占めている視覚化された景色と同一であると述べることに意味があるだろうか。私には、それは直感に反する不合理の極みとしか思えない」、「明らかに異なる二つのものが別々に性質を示しているにもかかわらず、時には同一のものであるということ」「明けの明星と宵の明星が同じもの」(33)

「論点を先取り」「物理的な現象と心の現象が同じかどうか」「問題は、意識的体験と脳内の物理的出来事とが相関ではなく、同一のものであるということ、どのようにして言いることができるかということである。もし相関関係が同一性を構成すると想定するならば、それは論点を先取りした誤りを犯すことになる。両者が同一であるという信念は実験的に確立された事実でも、論理的に説得力をもった論証でもない。それは自然主義的な信仰の表明でしかない」(34)

「心脳同一論の明白な弱点は二重性質によって隠されることがある」、「脳内の出来事には物理的と心的という二つの異なる性質があり、両者を表述するには別々の言語が必要だ」(34)、「二つの言語は互いに翻訳可能な言語のもとで、同じ対象を指しているのではあ

る。ここには何の問題もない」(35)、「またもや論点の先取りである」

「機能主義者の理論はさらにあいまいである、「変化してやまない心のあり方が、計り知れないほど複雑で変化してやまない脳のあり方と同一である、と主張している。この同一性は機能主義的な側面から理解されるべきである」(36)、「同一論は純粹に科学的な仮説であるかどうかという疑問である」、「心脳同一論が偽であるとした場合、通常科学の範囲ではこれを偽であると決定的に反証するための観測手段も実験手段もない。したがって心脳同一論は科学的な仮説ではないことになる」(37)、「同一論は自然主義哲学を前提にして生まれた理論、偽であるならば、その反証性を構成する要素が何であるかを考えることのできるような科学的仮説ではないのである」(38)

意識の神秘性

「心脳同一論に強く傾倒している心の哲学者のなかには、あまり主張しすぎないように慎重にしている人びとがいる」「チャーチランド」「脳神経科学者たちはそれほど教条主義的ではない」(38)、「物理的な現象のカテゴリーと主観的な現象のカテゴリーとのあいだに説明のつかないギャップがある」(39)

「相関関係を同一性には変えられない」、「現在の文化において広く想定されてはいても、心脳同一論はけっして科学的に確立された事実ではない。それは自然主義の信仰箇条の一項目に変わりはない。この信仰は、心の哲学者たち」「による一途な研究に支えられている」、「それほど多くの心の哲学者たちが脳神経科学の研究成果に最小限の関わりしか持っていないという事実」(42)、「現在、喧伝されている還元プログラムのすべてには欠点が目立ちすぎる」、「心脳同一論を修正する方向に動いている」(43)

1・4 ヒックの随伴現象説批判

随伴現象説は、弱い自然主義（非還元主義的物理主義）ではあるが、心についての日常的意識・直感とは矛盾する。

「単純な心脳同一論は」「いっそう洗練された自然主義の諸理論に取って替えられている」、「意識が脳の働きによって生みだされた非物理的随伴現象であるとする随伴現象説の別様態」「随伴現象説に基づく心脳同一論」(44)

リベットの実験

「意識的な決定が神経活動よりも遅れるという随伴現象的な反映であったことを示唆している」、「心ははるかに意識以上のものである」「無意識の過程も、それ自体が神経系との相関を持っているはずである」(45)、「無意識の事前計画の適例であろう」(46)

「リベット、エクルズたちは、心には神経による刺激と感覚による刺激の順序を意識のなかで入れ替える能力あることを立証するものとして、その実験結果を解釈したのである。これは同一論や随伴現象説を支持するものではなく、心脳二元論のほうを支持するものであろう」(47)

社会的産物としての意識

「「おこなわれる」を「よるものである」と同じと見るのは、哲学的にナイーブであることに注目されたい」、「ニューロンの特定の状態と、意識的であることの主体的体験とは、存在論的に異なるカテゴリーに属するし、また異なる記述体系のなかで定義されるものでもあるからだ」、「しかし、これをもとにジンガーは脳と意識の二元論へと結論を下すようなことはしない」、「意識の主観的現象が社会的産物であると信じている」、「社会的相互作用は、ほかならぬ人間の意識が生じるための必要条件だ、ということは重要な真実であるが、この事実自体は一元論と二元性のあいだにあって中立である。私たちは人間レベルの意識が言語に結びついていることは明かであり、言語は社会と文化に結びついてい

る)、「フォイエエルバッハ」「マルクス」(49)

「相互的コミュニケーションを通じて意識が生じる」「自己意識という現象」(51)、「意識を可能にした歴史的条件と意識そのものとは、正しくは、同一視することができないのである」(52)

意識と進化

「ダマシオ」「意識には生存価値と進化価値とがあるといえる、と彼は結論する」(54)、「進化過程における意識の生物学的価値を見出そうとするさまざまな試みがある」(55)、「行動に変化を及ぼすような働きかけ」(56)、「自己を超えるものという価値は、意識のおかげで人間だけに備わっている」(57)

創発的性質としての意識

「心は脳の創発的性質であると主張するものである。「創発」という言葉は「科学と宗教を結びつける何か呪文のような響きがある」(57)

「チャーチランド」「性質二元論という観念」「脳の複雑さに対する創発的性質」「物的と心的という二つの実在の二元論ではなく、脳という実在が持っている性質の二元論」「物理的性質と心的性質の二元論」、「固体である、色が付いている、生きているなど」「これらの性質は物理的な創発的性質の何であるかは説明しているが、意識が物理的・創発的性質であることを示すものではない。そう決めてかかるなら、意識は、どのようなものであれ、身体的な脳の性質であるかどうかという、基本的な論点を先取りすることになるだろう。性質的二元論は一元論を受け手とする初歩的な論点の先取りである」

「人工知能」とのアナロジー」(59)、「言わば」とか、あるいはメタファーとして」(60)、「サイエンス・フィクションにすぎない」「コンピュータは意識することもなく、ただ人間の振る舞いをなぞるだけだからである」(61)

「いまのところそれに対する提言は何もない」(62)

「随伴現象説はどの形態であっても、意識の存在については説明ができていない、というものである」(63-64)

生物学的自然主義

「ジョン・サール」「生物学的自然主義」「モノが意識的になるのは、まさに自然の事実である。」「意識は脳の生物学的様相なのである」(64)、「随伴現象には「基底にある神経生物学の因果的効力以外の力はない」、「しかし「心の過程はすべて神経学的経過に起因する」という主張」「は純粹に一つの断定であり、「相関関係」がすなわち「同一」を意味するという論点を先取りしている」、「意識のほうから脳へと向かう因果性の事例があるかどうか、これが重要問題である」、「脳から意識への因果性と意識から脳への因果性の違い」(65)

「それでもサールの理論では、ニューロンの活動と意識とは同一なのである」、「ニューロンが活動するしかたと相互作用をするしかたとのあいだの差異は見出されていない」(67)、「私の結論は、サールの理論を受け入れるとよいとする理由は、十分にないということになる」(68)

1・5 ヒック説の批判的検討から

ヒックの議論の吟味を通して、問題状況を明らかにする。創発性説を随伴説に一括することの問題性。ヒックの議論の評価できる点(従来の諸説の批判的総括。自然主義の論点先取を明らかにした)と問題点(ヒック自身の論点先取、積極的議論が足りない)。

ヒックは、心脳同一論と随伴現象説という自然主義的な脳科学を批判し——ヒックは弱い自然主義と強い自然主義の区別を行った上で(グリフィン、芦名)、——、自由意志(心が脳に影響を及ぼす、下向きの因果性、心的因果性)の擁護を試みる。この点で、

ヒックは近世哲学の「決定論対自由意志」という問題連関において議論を行っている。しかし、ヒックはデカルト的二元論に回帰するという選択肢も取らない。

ヒックの問題点は、ヒック自身の議論もまた論点先取を行っている点である。ヒックの批判にもかかわらず、創発性の議論（創発主義）は生きている。これが、次章のテーマになる。ヒックの立場は、彼自身の議論にもかかわらず、強い創発主義と両立可能と思われる。

「明らかに意識が原因となって脳に働きかけるという状況を検討しなければならない」(69)、「両方向に向かう因果関係があるということが一応の証拠である」(70)

脳の可塑性

「脳はかなりの可塑性を持った細胞組織でできている」(70)

仏教との瞑想に見る脳の可能性

「心で念じることで新たな神経状態が作りだされる方法については、多くの事例がある。しかし当面の目的にもっとも興味深い例は、仏教徒の瞑想の達人にたいする実験的研究である」(73)

「仏教徒による正念の修行が扁桃体を制御するのではないだろうか」(76)

「意識と脳の同一論、および意識は思考や行動を発動する力を持たず、ただ脳の活動を受動的には反映するだけとする意識論に対しては、次の考えが代案になる。意識と、それに加えて無意識的な心とは、脳と不断に交流する非物理的な実在として存在する。これはデカルト的二元論への逆戻りだろうか。否、デカルトではない」、「非デカルト的二元論」(78)
「どのようにして交流活動が成り立つのだろうか。自然法則に従ってそうなるのだとしか言えない」(79)

両立論者と非両立論者の自由

「非両立論者ないしリバタリアン（自由至上主義）の自由」「両立論者の自由というのは、客観的に見れば、私たちは全面的に決定されてはいるものの、そうした状況と両立しうるような主観的意味における自由のことである」(81)

「自由意志は」「広範囲におよぶ内包的な因子によって条件づけられ、制限されている、ということには疑問の余地はない」(83)

「非両立論者の見方」「自分にも他人にもまったく予測できない決断をくだすことがある、というもの」、「主として二つの領域で生じる」、「一つは責任ある道徳的な決断を下す領域であり、もう一つは新たな思想の構築、音楽・文学・彫刻・絵画・音や色のパターン場等々の新たな芸術の創造」「の領域である」(84)

「デネット」「唯物論を前提とする点で、デネットは明らかに、もっとも基本的なところで論点の先取りをしているのである」(84)

「コンピュータ自体に意識があり、単にプログラムによって意識的と見える振る舞いをシミュレートするのではないというなら、それはもはやコンピュータについて語っているのではない」(86)

実験に基づく証拠

「リベット」「最近自分がおこなった初期の実験の意義を振り返っている」「意識的な意志のほうは筋肉が手首を動かそうとし始める約0・一五秒前に生じたこと」「意識機能が随意過程の最終結果に影響を与えるのに十分な時間となるだろう」「意識機能にとって潜在的に利用可能である」(87)、「リベットの結論はこうである。私たちには監視する自由意志とでもいうものがあり、それによって意識的自我は脳を通じ、身体に関して普通は無意識自我が指揮権を乗り越えることができるのである」(88)

「次のような仮説」「脳によって制御される人間の身体は、発展進化するようにプログラムされた方法で行動したり反応したりするような、とてつもなく複雑な生体として機能する。したがって、これまで、心脳同一論や随伴現象論的な理論によって身体は記述されたきた。しかし身体には、意識と、そして意識的な覚醒レベル以下で生じるさらに多くの心的活動との両方からなる心的流れが住みついている。」「物理的な環境のなかで、一瞬一瞬進む道を決めて行動する身体を制御することが、脳の通常の働きである。脳に制御された身体の行動の結果は絶えず意識のなかに現れてくるが、意識自体はその状況に付き従うだけである。意識して制御することは、危険な混乱を招きかねない」(88)

「意識的自我が決断する事態というのは、より深刻なやりとり、熟慮を要する道徳的な判断、難解な問題を解くために要する知的な努力」「かかわっている」(90)

「あらゆる心的な行動には、連続した神経の相関がある。しかし自由意志を働かせるのは意識的自我であり、意識が神経との相関の生成に（影響するというよりは）原因となるのは、自由意志の行使においてである」、「私たちの生活の大部分は蓄積された無意識的な知識や体験に支配されているが、より重要な瞬間」「には、私たちは意識的な自由意志を行使している」、「ここでも私たちは、遺伝、環境、自己の履歴、入手可能な情報など、さまざまな因子の範囲内で自由を行使しているのである」(91)

「私たちはいくつもの決定論の境界線上に生きている」(92)

量子の不確定性

「自由な行動というものは、もしそれがあるとするならば、現在考えているような知的活動をも含めて、無作為でも決定論的でもありえない。とはいえ、意識が神経活動によって影響を受けるだけでなく、影響を与えることもできるかどうかという中心的な疑問点は、依然として残る」(93)

自己に言及する問題

「リタ・カーター」「自由意志はこうした幻想の一つである」、「この「私たち」が本当にだまされているならば、だまされているということ、どのようにして知るのか」(94)

「私たちは全面的に決定されているのかもしれないと言うのはかまわない」(98)

「なぜ真理を探究する機械は決定されないといいた種全体にわたる妄想に行き着くのだろうか。その理由は、おそらく妄想が生存価値の何らかの形態を持っているからであろう」(99)

「私たちは自分が自由でなければならないし、また自由であると思っていることは明らかである」(100)

「決定論は道徳性をしだいにむしばんでいくのである」(101)

「私の結論」「物理的決定論のすべてを退けること、自由で理性的な判断と誠実な道徳的選択を容認すること、ならびに非物理的なものの存在と物理的実在と同様に容認すること」「そうすると、今後さらに膨大な可能性が開かれてくる。私たちの精神生活が純粋に電気化学的な神経活動ではなく、また物理的に決定された脳内での出来事の随伴現象説的な反映でもないのであれば、物理的宇宙と同様に、非物理的な実在も存在することになる。人間は物理的につくられた有機物以上のものである。そして、非物理的で超自然的な実在があるだろうということ、頭から排除することはできなくなる。その実在は、おそらく宗教が主張する、限りなく意義深いものであり、そしてまた、私たち自身の本性が有する非物理的側面に応じるものでもあるのだろう」(101)

3. 創発主義の可能性

2・1 創発主義と宗教哲学

・非還元主義。強い創発主義と弱い創発主義との区別。

創発性の定義と思想的背景：西洋の自然哲学の伝統

アリストテレス、プロティノス、そしてヘーゲル

強い創発性と弱い創発性

弱い自然主義・非還元論的自然主義

・実在の諸領域を横断した議論の魅力：

次元論：システムは、先行するシステムの創発的な秩序として生成する（創発性）
人間存在（生）において、こうして生成した諸次元が統合されている

人間は多くのシステムの複合体（システムではない）

生命システム → 心的システム → 社会システム

物質・無機的 有機体・生命 心 精神 歴史

物質／生命／心／精神（社会・文化）

道徳・宗教

諸次元の自律性と生成、そして統合性

・デイヴィス、人間の実在について、基体は一つであっても、多様な諸形態を認める（多元的実在論もあり得る）。広範な実在領域の境界をおける議論を行っている点が魅力的、しかし、この問題領域に専門家にとってはうさんくさい。

科学者における大胆な議論。しかし、その多くは実質的には従来からある説の焼き直しにすぎない、思想研究の素人の議論。思想研究も自然科学研究に勝るとも劣らぬ専門性があり、専門以外の問題領域については、十分な研究が必要であり、発言は謙虚であるべき。最悪の例の一つが、ドーキンズ。

・全体論＋進化論

・神とは何か？

2・2 創発性と生命

清水。物質から化学進化、そして生命というシナリオ。非平衡の熱力学・非線型的な複雑系の物理学。

2・3 創発性と心

クレイトン

ルーマン：オートポイエーシスと心脳問題

・オートポイエーシス

・マトウラとヴァレラによって、生命体に妥当する組織原理として導入（生命システム）
システムは自らの働きによって自身の組織を継続的に産出する

細胞は閉鎖的システム（一つの作用する統一体）であり、それによって環境との接触（エネルギーや物質の交換、開放性）を行いうる。細胞は環境との交換を自ら制御する。閉鎖性と開放性とは相互補完的な関係にある。オートポイエーシスのシステムは自律的(Autonomie)ではあるが、自足的(Autarkie)ではない

・神経システムは、ニューロンの自己関係的なネットワークである

ニューロンの活動は先行するニューロンの活動に対する反作用

脳は閉鎖的な自己参照的システム（飛行内部の飛行士）

脳は感覚器官によって外界と接触するのではない

感覚器官は外界の出来事をニューロンの活動に転換する（内と外には一義的な相関関係はない） - 7 -

知覚は外部世界をそのままに映し出したものではなく、システムの外部にある世界をシステム内部で構成したもの

・自己参照性（自己関係・自己準拠） → 次元の独立性

キルケゴール

閉鎖性に基づく開放性

・一般化：心的システム、社会システム

心的システムの要素は、思考内容、表象

・意識・心は、思考内容から思考内容へ、表象から表象への連鎖

自らの活動を通して表象を継続的に産出して行く

・物質的・エネルギー的な下部構造を土台にしている。環境からの寄与なしに自力で存立しているわけではない。しかし、システムの統一性と諸要素は、システム自身が産出する

意識は脳の活動に依存しているが、脳・脳波・脳細胞活動と同一ではない。脳の活動は思考内容ではない・脳は思考しない。脳は意識の環境である。ニューロンの活動が思考・表象に転換される。

・構造的カップリング(strukuelle Kopplung)：システム間の依存／非依存

脳と意識とは別々に働くが互いに依存しあっている

志向性は脳に還元できない（心の哲学の問題）。

・脳科学の意義あるいは限界

心のシステムのオートポイエーシスと構造的カップリング

脳は心の実在的な基盤であるが（還元主義の一面の真理）、心は脳を含めたより広範な有機体組織の全体論的現象である。宗教論は脳科学の成果に依拠しそれを包括するが、脳科学に還元されない。

↓

科学と宗教との対話とはどのような仕方で遂行されるか。

対話の非対称性

・社会の構成要素は人間ではなく、コミュニケーションである。可能なコミュニケーションの全体としての社会。人間は社会システムの環境である。

・社会システムは自己参照的過程の中で継続的にコミュニケーションをコミュニケーションに接続するオートポイエーシスのシステムである。

人間はコミュニケートできない。コミュニケーションのみがコミュニケートする。

・人間の意識システムは、他の意識システムと直接的に接触しない。 - 8 -

心的システムは閉じた意識連関という形態で有意味に作動し、社会システムは閉じたコミュニケーション連関という形態で作動する。意味は可能性と現実性との差異として捉えられていたが、閉鎖的で自己参照的な事象である（意味はさらなる意味を指し示しており、意味の領域を越えることはできない）。

・意識とコミュニケーションとは構造的にカップリングしている。

他者の心は直接経験できない。意識内容（思考・表象）がコミュニケーションへ（例えば発話）と転換されることによって、間接的に接触する。

コミュニケーションはそれに参加している人格の意識システムがそれぞれの瞬間に何を考えているかについて情報を与えるものではない。コミュニケーションと意識とが分離しているからこそ、より大きな独立と自由が可能になる。

2・4 創発性と超越——フィリップ・クレイトンのまとめから合

自然主義的な神論の可能性＝伝統的神論の転換

時間的な神、神と世界の相互性

自己超越性と超越性

2・5 神と実在の全体性——超越あるいは深み

還元主義から批判的実在論へ

クレイトン、清水、デイヴィス、ルーマン

4. まとめ——宗教研究にとっての脳科学の意義

以上論じたように、現在、脳科学との関連における宗教研究は、きわめて活発な状況にあり、今後もその動向は継続するものと思われる。当然に、様々な研究成果が現れ、宗教研究に影響を及ぼすものになることも考えられる。本稿を閉じるにあたって、現時点での研究状況という限定付きではあるが、脳科学の連関における宗教研究が、宗教理解にとっていかなる意味をもっているのか、ついて私見を述べることにしたい。

結論的に言えば、現在のところ、あるいは当面の間、宗教研究者が脳科学の成果に一喜一憂する必要はない、冷静な対応で十分であると思われる。たとえ、脳の物理的活動が神イメーজを生み出すこと、あるいは宗教経験が脳のどの領域と関わっているかが解明されてとしても、それは神の実在の否定にはならないからである。実際、還元主義的物理主義に立つ脳科学者や哲学者が素朴に考えるほどが、神の非存在の証明は簡単ではないのである。また、ヒックが指摘するように、宗教経験にとって重要なのは、短期的な経験の有無ではなく、それが長期的なプロセスにおいてもたらす結果(成果・果実)なのであって、それは、現在の脳科学が行っているような実験の範囲を遙かに超えた時間経過(場合によっては、人生の全体)において批判的に検討されるべきものなのである。

もちろん、脳科学が宗教研究にとって無意味であると考えする必要はない。

- ・ 自然理解の精密化、宗教の位置づけについての理解の深化→次元論
- ・ 創発性と次元論から、宗教を含めた実在論を構築する

自然の宗教哲学、創発主義的な次元論とそれに基づく心脳関係論

しかし、こうした脳科学の成果が宗教あるいは宗教研究に本格的に関連づけられる場合に、それは伝統的な神理解や宗教経験理解に大きな変更をもたらす可能性があることも、留意すべきであろう。

神観の転換は、最近の「宗教と科学」関係論においてすでに生じている事態であって(金承哲『神と遺伝子』教文館)、「脳科学と宗教」というテーマはこうした文脈に位置づけるべきと言えよう。

<文献>

0. John Hick, *The New Frontier of Religion and Science. Religious Experience, Neuroscence and the Transcendent*, Palgrave, 2006. (ジョン・ヒック『人はいかにして神と出会うか 宗教多元主義から脳科学への応答』法蔵館、2011年。)
1. Niklas Luhman, *Funktion der Religion*, Frankfurt a. M. 1977. (『宗教社会学 宗教の機能』新泉社。)
 - , *Gesellschaftsstruktur und Semantik. Bd.2*, Frankfurt a.M. 1981.
 - , *Society, Meaning, Religion. Based on Self-Reference*, in: *Sociological Analysis* 46, 1985.
 - , *The Autopoiesis of Social System*, in: Felix Geyer / Johannes van der Ziuwen (ed.), *Sociocybernetic Padadoxes*, London 1986.
 - 『システム理論のパラダイム転換』お茶の水書房、『自己言及性について』国文社、『宗教論』法政大学出版局、など。
2. Georg Kneer, Armin Nassehi, *Niklas Luhmanns Theorie sozialer Systeme*, W. Fink, 1993 (2000). (クニール/ナセヒ『ルーマン 社会システム理論』新泉社。)

3. Benjamin Libet, *Mind Time, The Temporal Factor in Consciousness*, Harvard University Press, 2004. (ベンジャミン・リベット『マインド・タイム——脳と意識の時間』岩波書店。)
4. Paul Davies, *God and the New Physics*, J.M.Dent & Sons, 1983. (P.C.W.デイヴィス『宇宙はなぜあるのか——新しい物理学と神』岩波書店。)
5. Philip Clayton, *Mind and Emergence. From Quantum to Consciousness*, Oxford University Press, 2004.
6. Philip Clayton and Paul Davies (eds.), *The Re-Emergence of Emergence. The Emergent Hypothesis from Science to Religion*, Oxford University Press, 2006.
7. 清水 博『生命を捉え直す 生きている状態とは何か』(増補版) 中公新書、1990 年。
8. 入来篤史「知性の起源——未来を創る手と脳としくみ」理化学研究所 脳科学総合研究センター編『脳研究の最前線 上 脳と認知と進化』講談社、2007年、131-181頁。
9. 中山剛史・坂上雅道編『脳科学と哲学の出会い 脳・生命・心』玉川大学出版部、2008年。
10. 信原幸弘編『シリーズ心の哲学 1——人間篇』勁草書房、2004年。
11. 信原幸弘・原塑編『脳神経倫理学の展望』勁草書房、2008年。
12. 中才敏郎・美濃正編『知識と実在——心と世界についての分析哲学』世界思想社、2008年。
13. 小坂井敏晶『責任という虚構』東京大学出版会、2008年。
14. Alister E. McGrath, *The Open Secret. A New Vision for Natural Theology*, Blackwell, 2008. (A. E.マクグラス『「自然」を神学する——キリスト教自然神学の新展開』教文館。)
15. Paul L. Swanson (ed.), *Brain Science and Kokoro. Asian Perspectives on Science and Religion*, Nanzan Institute for Religion and Culture, 2011.